

國學院大學学術情報リポジトリ

ギラルドゥス・カンブレシスと「セント・デイヴィズ問題」(3)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000986

ギラルドゥス・カンブレシスと「セント・デイヴィズ問題」(Ⅲ)

永 井 一 郎

目次

- I はじめに
- II 主要な史料と利用の留意点
- III セント・デイヴィズ教会（以上3節, 63巻1号）
- IV 「セント・デイヴィズ問題」の構想（1194年～1198年）
- V 「セント・デイヴィズ問題」の発端（1198年～1199年）
- VI 論争開始（1199年～1200年）（以上3節, 63巻3・4号）
- VII 論争の展開（1200年～1201年）
- VIII 泥沼化する論争（1201年）
- IX ギラルドゥスの敗北（1201年～1203年）（以上3節, 本号）

VII 論争の展開（1200年～1201年）

1200年1月に開かれた教皇インノケンティウスの裁定会議で、ギラルドゥスは自分の構想実現に明るい見通しをもったはずである。まず、教皇の態度は明らかに彼に好意的であった。次に、ギラルドゥスが自分の要請の根拠とした点、すなわち、司教の選出に関して教皇が本源的に大司教より優位に立つという主張は、世俗権力と戦う姿勢をみせていた教皇にとって望ましい方向性をもつ。したがって、教皇は自分の論理を採用しながら裁定を進める可能性が高い。ギラルドゥスはこのように状況判断したのではなかろうか。

『自叙伝』などこの時期について記す文章はすべて「セント・デイヴィズ問

題」の提起が失敗に終わった後に書かれているので、彼がもっていたはずの明るい見通しはそれとして記されていない。しかし、教皇との良好な関係を築いたことを誇る言及はいくつかなされている。例えば、ギラルドゥスが献呈した著作を教皇が喜んで受け取り、そのうち一冊は自分の手元に置くことにしたという記述や⁽¹⁾、第1回会議後にギラルドゥスが教皇庁文書館でセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する文書を探索したいと願い出た時にこれを積極的に認めたという記述である⁽²⁾。いずれも彼が教皇は自分に対し好意的であると理解してもおかしくない行為である。むしろ彼は宗教の問題が政治と密接にかかわって展開すること、また、イングランド王宮が聖界の論理をつきつけられても簡単に妥協しないことを充分知っていたから、目標達成まで多くの難関があると覚悟していただろう。それでも、まずは幸先のよいスタートであった。

第1回会議の議論はセント・デイヴィズ教会次期司教の問題に限定されていたが、教皇は同教会の大司教座権にも関心を寄せていた。それは会議後に上記の関連資料探索を許可したことから明らかである。1200年の時点でギラルドゥスは、半世紀ほど前に司教バーナードがセント・デイヴィズ教会の大司教座権復活を求めて教皇エウゲニウスと交渉したことは知っていたが、交渉内容を記した文書が残されているかどうか確認していなかった。関連資料はセント・デイヴィズ教会と教皇庁に残されていると考えるのが自然であるが、ギラルドゥスはまだいずれにおいても調査を行っていなかった。教皇庁での調査がなされていなかったのは当然として、彼が自分の教会でも関連資料の探索を済ませていなかったのであるから、この問題に対する彼の本格的関心は最近のもの、すなわち、「問題」の構想とともに生まれたものであったと推定してよいであろう。

教皇庁文書館でギラルドゥスはいくつか大司教座権の裏づけ資料を見つけた⁽³⁾。まず、教皇庁が使っている司教区リストの中で、ウェールズの4司教区がカンタベリー管区と朱書された欄の外にまとめて記されていることが判明した。大変細かい点であるが、これは教皇庁がウェールズの司教区を必ずしもカ

ンタベリー大司教の管轄下にあると認識していなかったと解釈できる。インノケンティウス三世もこの報告を聞いて興味をもち、ギラルドゥスに対して自分の先任者がセント・デイヴィズ教会に何か特権を与えた記録がないかどうか、さらに調査を進めるよう促した。調査の結果、1147年に教皇エウゲニウスがカンタベリー大司教セオボード宛の手紙の中で同教会の大司教座権を取り上げていることがわかった。かつてこの問題が教皇によって本格的に取り上げられ、関係するカンタベリー大司教にも問い合わせがなされたという事実が出てきたのである。しかし、その一方で、教皇が最終判定を下さないまま問題がいわば自然消滅したこともわかった。問題提起者であるバーナードが死去し、次のセント・デイヴィズ司教は、大司教の要求に応じて、この問題の継続審議を教皇庁に求めなかったからである⁽⁴⁾。

教皇インノケンティウス三世は以上の事実がセント・デイヴィズ教会の大司教座権を再検討する充分な理由になると判断した。彼は一方でギラルドゥスにウェールズにおけるキリスト教の歴史を略述して提出するよう求め、他方でこの問題を検討する委員会を設置すると約束した⁽⁵⁾。教皇が積極的に動き出したのであるから、ギラルドゥスにとって大変な朗報である。

『自叙伝』は教皇に提出したウェールズのキリスト教史について言及していないが、その内容は彼の他の著作からかなりの程度わかる。リヒターに従ってその概要を紹介しておこう⁽⁶⁾。

まず、彼はブリテン島のキリスト教史を略述している。ポイントは次の5点である。

①2世紀にブリテン島の布教が始まった。②その後この島に5つの大司教区が設けられ、それぞれ大司教座がカエルレオン (Caerleon)、カンタベリー、ロンドン、ヨーク、セント・アンドルースに置かれた。③5世紀に異教徒であるアングロ・サクソン人の到来によってイングランドではキリスト教が一度消滅した。しかし、ウェールズとスコットランドでは大きな被害はなく、古いキリスト教が存続した。

④6世紀以降教皇グレゴリウス（Gregorius）一世の命によってアングロ・サクソン人の改宗が進められ、改めてカンタベリーとヨークに大司教座が置かれた。⑤11世紀後半にイングランドを征服したノルマン人は、それまでのキリスト教組織を継承し、王国拡張の手段として利用した⁽⁷⁾。

ギラルドゥスは以上5点を史実として挙げているだけであるが、ここから彼が教皇に読み取ってほしかった点は明らかである。すなわち、ブリテン島のキリスト教史の中でウェールズ教会はイングランドのそれよりも古い歴史をもっているのであるから、ウェールズの教会はすべてカンタベリー大司教に服従すべきであるという大司教の主張は不当であると教皇に伝えようとしたのである。

次に、ギラルドゥスは大司教座であったセント・デイヴィズ教会がその権利を失った歴史的経過について簡潔に述べている。教会の創始者である聖デイヴィッドが南ウェールズの大司教座をカエルレオンからセント・デイヴィズに移し、その後25人の大司教がこの教会・教区を導いた。しかし、最後の大司教聖サムソン（Samson）が教皇グレゴリウス一世の時代に外敵を避けてブルターニュに移住し、間もなく大司教座もドル（Dol）へ移した。こうして形式上セント・デイヴィズ教会は大司教座ではなくなったが、教会の実体である聖職者たちは大司教座にふさわしい権威を保持し続けた、というのである⁽⁸⁾。

ここでもギラルドゥスの意図は明白である。セント・デイヴィズ教会は本来大司教座であったのだから、その復活を教皇に求めるのは当然の権利であり、カンタベリー大司教にこれを妨げる権利はないという主張である。

最後に、ギラルドゥスはウェールズの教会が11世紀末までカンタベリー大司教の支配に服していなかったことを強調している。6世紀にイングランドにキリスト教がもたらされた後、これにウェールズ教会が服従したという記録はない。むしろ、ローマ式のイースター設定を拒否するなど、ウェールズ人の自立を物語る事例が多く見られる。服従どころか、彼らはアングロ・サクソン人の改宗を支援するなど先輩として優位に立っていた。2代目のカンタベリー大司教ラウレンティウス（Laurentius）が宗教会議を開いてウェールズ教会を

支配下に置こうとした時も失敗している⁽⁹⁾。ベダ (Beda) の著作を見ると、ウェールズの教会がイングランドの教会に服従していたと思わせるような記述はまったくない。もしそうした事実があったならば、イングランドの人であるベダは必ず記録しているはずである。実際、今日でもウェールズの教会が、スコットランドのそれと同様に、ローマ教会以外の教会に服したことはないという事実を記憶している人々がいる⁽¹⁰⁾。このようにギラルドゥスはいろいろな理由を挙げてウェールズ教会の自立性を主張している。

ギラルドゥスがまとめたウェールズ教会史、特にセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する記述が教皇にどのように受け止められたのか、彼は明記していない。しかし、その後数ヶ月間の教皇の行動から推測すると、教皇がギラルドゥスに好意をもち、彼の記述を大枠で信用したと考えてよい⁽¹¹⁾。

1200年春に再度カンタベリー大司教の使者がローマに到着し、教皇に対してこれまでとは違った申し立てを行った。セント・デイヴィズ教会は1199年のクリスマス直後に次期司教の単独候補としてセント・ドグマイル修道院長ウォルターを選出し、イングランド王もこれを受け入れたというのである⁽¹²⁾。大司教としては、ウォルターは王の承認まで得ているのであるからギラルドゥスより優位の司教候補であり、教皇もこれを認めるべきであると言いたかったのであろう。

しかし、同教会内の選出時期で比較すると、両者の優位性は逆転する。まず、初めて候補となった時期は両者とも1198年7月であるが、ギラルドゥスが単独候補とされたのはおそらく1199年1月であり、6月には確定していたのに対して、単独候補ウォルターへの言及は上記の手紙が記す1199年12月が最初である。また、ローマ教皇に伝えられた時期で比較すると、ギラルドゥスは1199年8月の教皇宛の手紙に単独候補と記され、12月には彼自身が教皇に説明している。これに対して、ウォルターの選出を教皇が知ったのは上記の1200年春である。一見して大司教の主張するウォルター選出は後からの、したがって、二重選挙というルール違反であることがわかる。さらに言えば、

1199年12月に本当にウォルターの選出が行われたのかという疑問も浮かんでくる。大司教が教皇によるギラルドゥスの聖別を何とか阻止するためにつくったフィクションである可能性もある。

当然ギラルドゥスは大司教側の申し立ては不当であると主張した。教皇も同様に判断したのであろう、ギラルドゥスの候補選出が先に行われたという簡明な理由付けをして、ウォルターの選出は無効であると宣言した⁽¹³⁾。その上で教皇は、ギラルドゥスの主張に沿って、まず1199年6月に彼が本当に単独候補として選出されたかどうか事実確認を行うことにし、加えて、次回裁定会議までの間セント・デイヴィズ教会の管理をギラルドゥスに委ねる決定を下した。ギラルドゥスの側からみれば、調査によって自分の選出が確認されることは間違いなく、しかも、自分の権限で教会内に不穏な動きが生まれないよう管理できるのであるから、また一步目標に近づいたと判断してもおかしくない状況である。さらに教皇はリンカーン、ダラム、エリーの各司教へひそかに手紙を送り、大司教の説得を依頼した。大司教に対して、ギラルドゥスに司教の聖別を与えるように、また、その際セント・デイヴィズ教会の大司教座権を要求しないという宣誓を求めないように勧めてほしいと伝えたのである⁽¹⁴⁾。大司教座権復活の可能性を残したままギラルドゥスを司教に任命するこの案が実行されれば、彼の目標はほぼ達成されたことになる。しかし、大司教がこの案を受け入れないことは教皇も充分知っていたはずで、ひとつのジェスチュアであったと考えるべきであろう。実際、教皇は慎重に行動しており、公の場では自分の最終判断を示唆するような発言をまったくしていない。政治的判断の余地を残しているのである。

1200年の夏にギラルドゥスはかなり明るい見通しをもって、ただし、具体的成果は何も得られずにローマを離れた。彼も教皇がイングランド王宮の利益に配慮する可能性を当然考えていたであろう。しかし彼は、教皇が自分に好意的対応をする一方で、これと正反対の意向を密かに王宮に示していることは知らなかった⁽¹⁵⁾。教皇はジョン王に送った手紙の中で、自分が王国の不利益に

なるような裁定を下すことはない」と約束し、同時に大司教への手紙で、強引な政策を採ると無用な緊張が生じるので慎重に事を進めるよう忠告していたのである⁽¹⁶⁾。後者だけを見ると教皇のスタンスはギラルドゥスに傾いているように見えるが、前者とあわせると実は逆であったことがわかる。上記の3司教への手紙も王への約束を踏まえて理解すべきであろう。王国の利益でまず考えられるのはセント・デイヴィズ教会の大司教座権であるから、教皇はすでにこの時点で「問題」を取り上げて、教会の要請を認めるつもりはなかったと判断してよい。しかし、この時点のギラルドゥスは教皇の本心を察知していない。

1200年秋にウェールズに戻った後、ギラルドゥスはセント・デイヴィズ教会を管理していたと推測される。しかし、『自叙伝』はこの時期の部分が欠落しており、しかも、他の関連資料がないので⁽¹⁷⁾、彼の具体的な行動はわからない。教会はまだ一致してギラルドゥスを唯一の次期司教候補と考えていた可能性が高く、彼が持ち帰った情報から教皇も実質的にこれを承認していると判断していたであろう。何よりも、正式の司教選任までの暫定的処置とはいえ、彼を司教区の管理者に任命したからである。他方、イングランド王宮は教皇の任命に不満であった。王国内の司教選任は王の権利であり、当然この権利は暫定的、あるいは、代理の司教にも及ぶと考えていたからである。実際、次の年にジョン王は、ギラルドゥスにセント・デイヴィズ司教区を委ねた教皇の決定について、王権の侵害であるとして抗議している⁽¹⁸⁾。

しかし、これは付随的な事項で、王宮にとって問題だったのは表面的とはいえ教皇がギラルドゥスに好意を示したことであった。ギラルドゥスに大司教座権に関する調査を許したこと、逆に1199年に行われたと王宮が主張した司教候補選出が却下されたことは、ともに王宮にとって不利な決定であった。秘密の手紙を受け取っていても、教皇がこれら2点から出発して王宮の意向に反する論理を展開する危険性があると考えたのであろう。

そこで、大司教は方向を変えて、ギラルドゥスに対するセント・デイヴィズ教会の全面的支持体勢を崩す工作を始めた。教会が一致して自分を推挙したと

いうギラルドゥスの主張を論破するためにも、彼に代わる司教候補を持ち出すためにもこの工作は有効と判断したのであろう。大司教は密かに使者をセント・デイヴィズ教会に送り、参事会メンバーの中で必ずしもギラルドゥスの司教就任を望んでいない人々に分派を形成するよう説得した⁽¹⁹⁾。反ギラルドゥス派の中核にすえられたのはウィットランド修道院長ピーターである。彼はおそらく自分が司教になるチャンスと考え、血縁者など親密な関係をもつ人びとに働きかけた⁽²⁰⁾。こうして教会の一致したギラルドゥス支持体勢にひび割れが生じ、教会内で「セント・デイヴィズ問題」の提起を阻止しようとする動きが始まった。

ギラルドゥスが大司教の秘密工作についてどの程度まで感知していたかわからない。彼はローマから帰国した後しばらくはセント・デイヴィズ教会の文書調査に没頭しており、しかも、調査の成果は充分にあった。50年ほど前に司教バーナードが同教会の大司教座権を復活しようと努力した際の文書が発見されたのである。その内容は教皇庁の文書館の関連文書と符合していた。確かにバーナードが時の教皇に大司教座権の復活を要請し、教皇はこれを容認する方向で調査を進めていたこと、しかし、調査結果が出る前に要請者バーナードが死去したため、それ以上の進展がなかったことが確認されたのである。ギラルドゥスは新しく発見した文書は次の教皇裁定会議で有利かつ有力な証拠となると信じ、意を強くした⁽²¹⁾。

大司教はセント・デイヴィズ教会の分断工作を進める一方で、ギラルドゥスには妥協案を提示した。使者を送って、もし彼が大司教座権復活の要求を国内外でやめるならば、彼を司教候補として受け入れる用意があると伝えたのである⁽²²⁾。ギラルドゥスに対する個人的感情は別として、大司教は「問題」をイングランド王国の統治にとって危険な動きととらえていたから、ギラルドゥスが司教になっても大司教座権を主張しなければ、セカンド・ベストとして容認するところまで妥協したのである。また、これは教皇が大司教に送った忠告に沿う案でもあった。しかし、ギラルドゥスはこの提案を拒否した。彼にとって

「問題」は当初より自分の司教就任と教会の大司教座権とが不可分に結びついたものであり、どちらか一方、それも、個人的な目標のみの実現では無意味であった。もし大司教の提案を受け入れるならば、司教になっても支配下の教会メンバーは自分を信頼してくれず、運営が難しくなることは容易に想像できた。また、聖界に身をおく者として、教皇の権力が世俗権力に優越するという信念を実証する機会も失われてしまう。

大司教はギラルドゥスが自分の妥協案をそっけなく拒否したことを知って、セント・デイヴィズ教会に対する工作をさらに強化した。1201年初めに大司教は自ら教会の代表者たちと会い、彼らから教会はギラルドゥスを次期司教候補に推挙したことはないという証言を引き出した⁽²³⁾。言うまでもなくこれは偽りの証言であり、おそらく大司教が何らかの圧力をかけた結果であろう。例えば、証言者が反ギラルドゥス派から選ばれ、大司教の意に沿う証言をするよう言い含められていたのではなかろうか。しかし、大司教はこれを教会を代表した、しかも、事実即ち証言として次の裁定会議に持ち出すことにした。教皇の忠告にもかかわらず、ギラルドゥスと全面的に対決する姿勢を明確にしたのである。

これと平行して大司教は王宮内の態勢強化をはかり、ジョン王に対して、ギラルドゥスの司教就任に反対であり、これまで彼を候補として考えたことはないと言明するよう説得した⁽²⁴⁾。この言明も少し時間をさかのぼってみれば事実反している。ジョンは1185年のアイルランド遠征でギラルドゥスの補佐を受けるなど彼と個人的な接触をもっており、当初は彼の動きに好意的であった。また、即位前ではあるが、彼を次期司教に選任する用意があると受け取られてもおかしくない発言をしている⁽²⁵⁾。こうした状況をよく知っていたから大司教はジョンを熱心に説得したのである。イングランド王権拡大のためという説得は成功し、王は正式にギラルドゥスを司教に任命する意志はまったくない、また、どのような方法であれ彼を支持する者は王権に反対しているとみなすと言明した⁽²⁶⁾。

こうしてギラルドゥスは次の教皇裁定会議で妥協を完全に排除したイングランド王宮と対決することになった。

VIII 泥沼化する論争（1201年）

1201年春にギラルドゥスは再度ローマへ行き、夏に開かれた第2回教皇裁定会議に出席した。前回の会議に比べるとギラルドゥスとイングランド王宮との対立は激しさを増していた。ただ、会議前の彼はこの点を充分認識しておらず、むしろ前回より楽観的であった可能性が高い。ローマ教皇庁で発見した文書と新しくセント・デイヴィズ教会で探し出したバーナードの資料を彼は携えており、大司教座権について今回は前回より強力な論陣を張ることができると期待していたのである。しかし、第2回裁定会議の展開は彼にとって予想外のものであり、終了時には厳しい状況に直面することになった。

なぜ予想ははずれたのか。この点を彼が後ろ盾としていた人々の動向から検討しよう。「セント・デイヴィズ問題」で彼は2人の敵対者を想定し、これと対抗するために2つの後ろ盾に大きな期待を寄せていた。敵対者は言うまでもなくイングランド王とカンタベリー大司教である。前節で説明したように、1201年の時点で王と大司教は一致してギラルドゥスの要請を拒否する態度を固めていた。ただし、これは彼が「問題」の構想を立てた段階で想定していた状況であり、特に驚くべきことではなかった。彼にとって誤算だったのは、自分の後ろ盾になってくれると信じていたセント・デイヴィズ教会の主要メンバーと教皇インノケンティウスの態度である。

まず、教皇に対するギラルドゥスの信頼は第2回裁定会議の開始時でも揺らいでいなかったと推定される。信頼の根拠は、西ヨーロッパでキリスト教世界の頂点にあって聖界の権利を強く主張していた教皇が、間接的にであってもその権利拡張に資する史料を無視するはずがない、必ずや自分が発掘した資料に基づいて論理的に「問題」、特にセント・デイヴィズ教会の大司教座権につい

て判断してくれるであろう、という予測ないし期待である。彼が教皇に期待したのは、特別の好意や恩恵ではなく、まっとうな裁定であったから、教皇の支援を確信できたのである。しかし、現実とは違っていた。前節で紹介したように、教皇はジョン王に対して、王権の縮小につながるような裁定を下さないと保証していた。ただし、当然のことながら教皇はこれを公にせず、ギラルドゥスに表面的な好意を示しつつ裁定を先延ばしにしていた。1201年春のギラルドゥスは教皇の真意を知らぬまま、期待を込めて裁定を待っていたのである。

次に、セント・デイヴィズ教会に対するギラルドゥスの信頼も「問題」提出時と大きく変わらずに保持されていたと思われる。ただし、カンタベリー大司教の分派工作に関する情報は何らかの形で彼の元に届いていたと考えるのが自然である。当然これは彼にとって危険な状況であり、しかも時とともに危険性が増大すると予想できた。

前述のように、ギラルドゥスは「問題」を構成する2つの要素、すなわち、セント・デイヴィズ教会の大司教座権回復と自身の司教選任を結びつけて教皇の裁定を求めたが、教皇が第1回裁定会議でまず取り上げたのは後者であり、それも結論を出さぬまま継続審議となっていた。したがって、第2回会議でも先に次期司教選任問題が審議されることはほぼ間違いなかった。こうした審議手順は必ずしもギラルドゥスのプランに沿うものではなかったが、会議主宰者の権限に属することであったから、彼も教皇のリードに従って議論を展開する準備を進めていた。すなわち、第2回会議ではまず次期司教の問題を自ら選任されるという形で達成し、その上で、司教としての権限も駆使して、大司教座権の問題と取り組むという手順にプランを変更していた可能性が高い。

以上の推定に大きな誤りがないとして、ギラルドゥスは2つの課題をもって第2回裁定会議に臨んだと思われる。ひとつは自分が正当かつ唯一の司教候補であると教皇に確認してもらうこと、もうひとつは、教会内の状況が悪化する前に教皇から次期司教として聖別を受けることである。ともにできるだけ早く決着をつけたい課題であった。しかし、事態は彼の望む方向へ進展しなかった。

第2回裁定会議に出席した当事者は、ギラルドゥスのほか、大司教の代理人アンドルウ（Andrew）、セント・デイヴィズ教会から派遣されたレジナルド・フォリオットおよびセント・ドグマイル修道院長ウォルターであった。後の二人はいずれも同教会の参事会員で教会代表者を名乗っていた⁽²⁷⁾。ギラルドゥスを取り巻く状況の変化はこれら出席者の顔ぶれにはっきり示されている。少し説明しよう。

①第1回裁定会議では、大司教の使者とセント・デイヴィズ教会代表者であったギラルドゥスとが教皇の面前で対決する構図であったが、第2回会議では形式上3種類の立場の人々が議論する場になっている。②3種の人びとを「問題」に対する姿勢で分類すれば、セント・デイヴィズ教会の大司教座権とギラルドゥスの司教選任を主張するギラルドゥス自身と、いずれの主張にも反対する大司教の代理人および2人の同教会代表者に分かれる。

③したがって、これまで名実ともにセント・デイヴィズ教会の代表者であったギラルドゥスの立場が、今回は必ずしも代表者とはいえない不安定なものに変化している。むしろ彼はこれまで通り自分こそが同教会の意向を体する代表者であると考えていた。しかし、今回は教会から別の2人が代表者として派遣されてきたわけで、当然いずれが正統な代表者かという問題が生じる。確かに「問題」の提起者、裁定の要求者はギラルドゥスであり、その意味で裁定会議に出席する資格をもっているが、実質的な議論は大司教代理と新しい教会代表者との間で進められ、彼の主張ないし存在は棚上げにされる危険すらある。

④実際問題として、ギラルドゥスはまず新しい教会代表者と対決し、教皇に自分の正統性を確認してもらう必要に迫られたのだが、これはかなり困難な作業であった。第1回会議からの継続性を重視すればギラルドゥスがより大きな正統性をもつが、今回のみで考えれば少なくとも形式上は新しい代表者のほうが優位に立つ。⑤これに加えて、大司教側が持ち出してくる新しい主張に対して、それが事実と反することであっても、彼個人の力で逐一反論し、その根拠を示さなければならない。

私は第2回の教皇裁定会議でギラルドゥスがこのような困難に、それも、突然直面したと考える。突然というのは、セント・デイヴィズ教会代表者が別に決められ、派遣されることを彼は知らなかったと推測されるからである。少なくとも彼は前もって知っていたと記していない。

裁定会議が開かれると、アンドルウ、フォリオット、ウォルターはみなギラルドゥスに敵対する発言をした。アンドルウの発言内容は残されていないが、ギラルドゥスが敵対的であったと言っているのであるから、大司教のこれまでの主張、すなわち、ギラルドゥスの司教就任とセント・デイヴィズ教会の大司教座権をともに否定する主張を繰り返したのであろう。加えて今回は、ギラルドゥスには同教会を代表する資格がないと申し立てた可能性が高い。

フォリオットとウォルターは、これも前回会議で大司教側から提示された点であるが、現時点でセント・デイヴィズ教会はウォルターを次期司教候補に推挙しており、ギラルドゥスは教会の推す候補ではないと主張した。その根拠として彼らは、ウォルターは1199年6月以前と同年末の2回司教候補に選ばれており、前者はギラルドゥスの候補選出よりも前であるという説明をした⁽²⁸⁾。このような不自然な申し立てをしたのは、第1回会議で大司教側が1199年のウォルター選出を根拠にギラルドゥスは正式候補ではないと主張した際に、ギラルドゥスのほうが先に選出されているという理由で、これを教皇が却下したからである。前回の申し立てを取り消すと新たな疑惑を招くだろうからそのまま残すことにして、ウォルターがギラルドゥスよりも早く選出されたことにすれば筋が通ると考えたのであろうか。しかし、これはいかにも不自然であり、むしろ反ギラルドゥス派の主張全体を疑わしくする理屈付けである。私は2度のウォルター選出はともに正規の手続きを経ていないと考える。

教皇も、ギラルドゥスの観察に従えば、この新しい根拠付けによい印象をもたなかった。しかし、教皇はイングランド王宮の意向に反する裁定を下す意志をもたず、また、その旨をすでにジョンに伝えていたから、今回は却下することなく聞き置くという態度をとった。その上で教皇は次の2点を出席者に伝え

た。

第1に、今回も次期司教に関して裁定を下さず、翌1202年4月に開く第3回会議において最終判断を示すことにした⁽²⁹⁾。前回と違って教皇はイングラント王宮、特にカンタベリー大司教がギラルドゥスに歩み寄りをする可能性がないことを十分承知していたはずであるから、この決定は時間稼ぎにほかならない。また、セント・デイヴィズ教会における分派工作が内外から進められている時の裁定延期はギラルドゥスにとって不利であった。彼はフォリオットらの申し立てが事実と反することを立証するために、この会議で十分に時間をかけて議論しかつたはずである。しかし、教皇は彼にこうした場を与えぬまま裁定を次回まで延期したのである。ギラルドゥスは大いに不満であっただろうが、教皇の決定に従うほかなかった。他方大司教にとっては、時間的余裕は有難かった。教皇の目も意志も届かないセント・デイヴィズ教会でさらに味方をふやし、ギラルドゥスを孤立状態にまで追い込むことができるからである。

第2はセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する申し渡しで、ここでも教皇はギラルドゥスの期待を裏切った。教皇は、次回裁定会議の時点で同教会の少なくとも過半のメンバーがギラルドゥスを支持して大司教座権の復活を求めるのであれば、この問題を正式に審議することにしたのである⁽³⁰⁾。上で述べたように、ギラルドゥスは第1回会議後精力的に大司教座権に関する資料を探索し、第2回会議ではこれを基に前回よりはるかに強力な議論を展開できると考えていた。実際、彼の著作に記されている資料は教皇も注目せざるを得ない内容をもっている。ギラルドゥスにとって第2回会議最大の目的は、収集した資料によって大司教座権をめぐる議論で決定的な優位性を得ることにあった。

しかし、彼は完全に肩透かしをくらった。彼の持参した資料、特にセント・デイヴィズ教会の資料は教皇に見てもらう機会さえ得られなかったようで、新資料に関する教皇の反応を彼はまったく記していない。しかも、教皇は大司教座権の審議開始について厳しい条件をつけた。反対勢力による内部分裂が進むセント・デイヴィズ教会で、1年後にギラルドゥスがメンバーの過半、実際に

は参事会員の半数以上を味方にするには困難になっていた。教皇の条件はギラルドゥスにとって決定的な打撃になる可能性が高かった。

以上の説明から、教皇は第2回裁定会議で自分のスタンスを実質的に明示したといってよい。それだけではなく、教皇は非公式により明確な意思表示を行った。カンタベリー大司教に手紙を送り、大司教の権限を縮小するような裁定を下すつもりはないこと、今後そうした事案が提出されても却下することを約束している⁽³¹⁾。第1回会議後のジョン王あての手紙と同趣旨の、より明確にポイントを押さえた内容である。

しかし、教皇は建前ではまだ中立を装っていた。立場上そうする必要があった。そのためであろう、教皇はギラルドゥスに対する配慮も示している。次期司教が就任するまで引き続き彼にセント・デイヴィズ教会の管理を委ね、加えて、第3回裁定会議には大司教自身が出席すること、および、同教会の財政状況を考えて、代表が裁定会議に出席する際の旅費を大司教が負担することを求めている⁽³²⁾。

いずれもギラルドゥスに利益をもたらし、その意味でバランスのとれた配慮に見えるが、具体的に検討すると必ずしもギラルドゥスに有利とはいえない。まず、大司教の出席要請について言えば、これまで彼が直接大司教と対決してその主張を批判する機会を得られなかったのに比べれば改善であるが、大司教の面前でその意に反する発言をする勇気のある教会メンバーは、ギラルドゥスは別として、この時点でほとんどいなくなっていたと思われる。とすれば、大司教の出席によってギラルドゥスの孤立が浮き彫りになってしまう可能性が高い。次に、大司教の旅費負担は、イングランド王国内の司教選出はすべて大司教の管理下で行われるべきであるという主張の裏付けに使われる可能性が高い。そうなれば、大司教と対等な立場で議論するというギラルドゥスの基本スタンスが崩されてしまう。

第2回裁定会議が大きな転換点になったことは上記から明らかであろう。教皇は仲裁者という建前を崩していないが、新資料をあえて取り上げず、また、

大司教側が分派工作を進める時間をあたえるという不作為によって、ギラルドゥスに決定的に不利な状況をつくりだしたのである。彼は第1回会議直後の時点ですでにイングランド王宮側に立って「問題」解決の道を探る意志をもってしたが、いまやそれが発言や行為の端々に見えるところまできた。ギラルドゥスの記述を後から読むわれわれには、教皇の本心がよくわかる。

では、肝心のギラルドゥスは第2回裁定会議をどのように評価していたのか。彼の記述の中にこの段階の教皇を批判する発言は含まれていない。裁定を先送りされたことの失望が言外にもらされているだけである。

それに反して、彼は大司教を厳しく批判している。「問題」提起の前からギラルドゥスは、聖職者というより政治家として駆け引きするウォルターの態度に批判的であったが、それとは比較にならない激しさで以下のように述べている⁽³³⁾。①ヘンリー世以来イングランド王権は勢力拡大のためウェールズ教会を支配下におく政策が採ってきたが、大司教ウォルターはこれを急激かつ暴力的に推進しようとしている。その結果ウェールズでいろいろな対立が生じ、不幸な事態が生まれている。混乱の責任はウォルターにある。②ウォルターはこれまで王権に従順な、より正確には、自分の意のままになる者をセント・デイヴィズ教会に送り込もうとしてきた。しかし、ウェールズ語を解しない者が司教になっても、管轄下の住民に神の教えを伝えることはできない。ウェールズ語に熟達し、ウェールズの事情に通じた者の中から司教を選任すべきである⁽³⁴⁾。③ウォルターは生来貪欲かつ野心的で、その無節操な行動を見ると聖職に就く資格を欠いていると言わざるをえない⁽³⁵⁾。

ギラルドゥスがこうした大司教批判を書き綴ったのは「セント・デイヴィズ問題」の最終裁定が下された後、すなわち、第2回会議より1年以上後のことと推定される。しかし、彼の語気は激しく、執筆時でも怒りを抑えかねているという印象を受ける。私は、彼の怒りはその場限りの感情突出ではなく、思いがけぬ結末を察知したため彼の心中に生じた動揺の表れであると推測する。少し説明しよう。

まず、彼はこの時までにイングランド王宮が、大司教だけではなく王もまた自分を排除しようとしていることを充分理解していた。これが状況理解のいわば基礎である。ただし、この点は彼が当初より覚悟していたことである。次に、彼は第2回会議でセント・デイヴィズ教会の主要メンバーに反対派が増え、教会を動かし始めていることを初めて明確に理解させられた。これまでも薄々感じ取っていた動きであるが、この時点で教会の中心的人々が大司教側の工作によっていわば寝返ったという印象をもったのである。しかも、この先さらに状況は不利になると予想された。彼が作り上げていた「セント・デイヴィズ問題」構想では同教会が一体となって共闘してくれることが前提条件になっていたのだが、それが崩壊したとわかったのだから、彼の動揺は大きかった。

最後に、決定的な要因は教皇の態度とそこから予想される裁定内容である。ギラルドゥスは、聖界の最高位者である教皇はその権威増大をはかるというスタンスで「問題」に裁定を下してくれると期待していた。彼の構想はそうした教皇への信頼に基づいていたのである。しかし、彼はこの点でも誤った予想をしており、それに気づかされたのが第2回裁定会議であった。第1回会議後は教皇が自分と「問題」に好意をもってくれたと楽観していただけに、この発見は彼にとって大きな打撃となった。逆転の激しさがギラルドゥスの激情を生んだ、と私は考える。

IX ギラルドゥスの敗北 (1201年～1203年)

第2回裁定会議の結果にギラルドゥスが失望したのと反対に、カンタベリー大司教は勝利の手ごたえを得た。彼は自分の利益を損なうような裁定を下さないという教皇の手紙を得ていたから、会議における教皇インノケンティウスのあいまいな態度から最終結果を充分予測することができた。しかし、大司教はこれで矛を収めず、王の権力を使って完全にギラルドゥスを排除しようとした。

まず、ジョン王は教皇が再度ギラルドゥスをセント・デイヴィズ教会の暫定管理者に任命したことに抗議した。イングランド王国における司教選任権はその代理人の場合も含めて歴代のイングランド王が築き上げてきたものであるから、教皇の行為は権利侵害であるというのである⁽³⁶⁾。

次に、王は教皇に政治的圧力をかけた。この当時ドイツ王の選挙をめぐるシュワーベンのフィリップ (Philip) とザクセンのオットー (Otto) が対立しており、教皇はオットーと連携しながら自分の政治力を誇示したいと考えていた。ジョン王はオットーのいとこで、親しい関係を保っていたので、オットーに教皇が「セント・デイヴィズ問題」について不利な裁定を下さないよう画策してもらったのである。この働きかけはかなりの効果があったと推定されている⁽³⁷⁾。ただし、教皇の基本的方針がオットーの圧力で変わったわけではなく、王の工作は念押しになったと考えるべきであろう。

さらに、大司教はジョン王に働きかけて、再度ギラルドゥスを王国の敵とする発言を引き出した。しかも、適用範囲が拡張され、彼を支持する人々にも及ぶことになった⁽³⁸⁾。今回の発言は少なくとも王宮内では周知のこととなっていたようで、1201年に行政長官がウィットランド修道院長に送った手紙の中で同趣旨の発言をしている⁽³⁹⁾。王の態度は妥協の余地なく明確で、ギラルドゥスがいつ反逆者として逮捕されてもおかしくない状況になっていた。

1202年秋にセント・デイヴィズ教会で同教会の大司教座権について調査する会議が開かれた。前年夏に教皇が約束した調査である。教皇の代理人として会議を主宰したのはエリーの司教ユースタス (Eustace) とウースターの司教メイジャー (Mauger) で、教会からは5人、ギラルドゥス、オズバート (Osbert)、フォリオット、マーチン (Martin)、サミュエル (Samuel) が出席した。ただし、5人は同じ立場で出席したのではなく、ギラルドゥスが大司教座権復活を主張し、他の4人は彼の主張に関して教会側の見解を述べることになった⁽⁴⁰⁾。いわば原告とその申し立てに関する証人という立場である。しかも、4人は大司教座権に関する認識や意見では一致して反ギラルドゥス的であった。

おそらくこの人選についても大司教の差し金があったのだろう。

調査会議の冒頭、ギラルドゥスは会議開催手順について抗議をした。教皇からセント・デイヴィズ教会の管理を委ねられている自分の都合を無視して会議が設定されたというのである⁽⁴¹⁾。彼は、教会代表者として会議をリードしなかったのだから、その目算が冒頭から崩れ、代表者どころか、孤立して自己主張するという立場に追い込まれていた。この点を彼はよく承知していたから会議そのものの成立にかかわる手順問題をとりあげ、抗議したのである。しかし、彼の抗議は無視され、審議にはいった。

最初に教皇代理は、セント・デイヴィズ教会がこれまで大司教座権についてどのように考えてきたか尋ねた。これに対して4人は直接回答せず、大司教権よりも前に次期司教の問題が取り上げられるべきだと主張した⁽⁴²⁾。司教不在の状況で大司教座権について議論するのはおかしいという論理であり、それとして筋は通っている。しかし、ギラルドゥスは強く反対した。彼らの主張は大きな問題を含んでおり、受け入れられるものではなかったのである。少し説明しよう。

まず、ギラルドゥスの「問題」構想では司教選定と大司教座権は密接に組み合わせられており、別々に論じるべきものではなかった。少なくとも教皇にはこの組み合わせで申し立てをしていたのであるから、司教選出の先行審議は認めがたい。次に、より現実的問題として、もしここで大司教に従順な者が次期司教に選ばれれば、彼は間違いなく聖別の際に求められる宣誓、すなわち、セント・デイヴィズ教会の大司教座権を主張しないという約束をするだろう。そうなればこの問題を再度提起することは少なくとも次期司教の任期中、最悪の場合には永久にできなくなる。そう判断したのも、この時点のギラルドゥスは教会の主要メンバーが改めて自分を次期候補に推挙してくれるといった甘い期待をもっていなかったからである。彼は自分が追い詰められていることをよく知っていた。

しかし、彼の主張はここでも無視され、次期司教選出問題が先に単独で審議

されることになった。ほとんど孤立無援のギラルドゥスを教会内の反対勢力が取り囲み、彼の主張の正誤を判定するという構図があらわになった。

ギラルドゥスは2人の会議主催者が司教選出についてどのような質問をしたか記さず、4人の答えだけを伝えている。おそらくいつ、どのような手続きでギラルドゥスは次期司教候補とされたのかと尋ねられたのであろう。質問に対して4人は彼を候補としたことは一度もないという返事をした⁽⁴³⁾。当然ギラルドゥスはこれに反論し、事実在即して自分が選出された経緯を説明したと推定されるが、主宰者である2人の司教は双方の主張について他の証言をもとめるなど、裏づけを取ることはしなかった。この点も推定であるが、主宰者が事実確認の作業を行っていれば、ギラルドゥスがそれを書き落とすとはまず考えられない。双方の主張は並置され、水掛け論の状況になった。いやむしろ、実態に即して言えば、ギラルドゥスの個人的主張が誤っていることを、複数の証言者が正すという形になった。事実が逆であることは、少なくとも今回の司教選出作業が始まってからの経過を知っている人によくわかっていたはずである。にもかかわらず、主宰者は結論を急いだ。

私は、主宰者がカンタベリー大司教の意向はむろん、教皇の真意をも知っていて、会議開催前に結論をすでに決めていたと推測する。それは、双方の申し立てを聞いた後でエリー司教がギラルドゥスに対して、なぜあなたはこれほど恩知らずなことを言う人々のために多くの問題を抱え込むのか、という問いかけをしているからである。エリー司教はよく事情を知っていて、ギラルドゥスに同情しながら、しかし、自分には偽証を覆す権限がないと暗に伝えたのであろう。この問いかけに対してギラルドゥスは、モラルは本人がその気にならなければ身につかないものだと答えている⁽⁴⁴⁾。このとき彼の心を支配していた感情を推測すれば、ひとつはかつて信頼していた教会メンバーの変身に対する絶望感、もうひとつは手段を選ばず自分を追い込む大司教への怒りであろう。少なくともこの時点で彼は、「問題」の構想時に最も基本的な後ろ盾と考えていたセント・デイヴィズ教会がその意志と力を失ったことを痛感していたはず

である⁽⁴⁵⁾。

それでもギラルドゥスはあきらめず、2人の司教に次のような妥協案を提示した。①まず、セント・デイヴィズ教会が聖デイヴィッドによる創建時から大司教座であったこと、および、その後大司教不在の時期が長く続いていてもこの本源的権利は存続していることを、イングランド王宮は認めるべきである。②しかし、同教会が現在カンタベリー大司教の支配下にあることは事実であり、これを自分も承認する。③そこで、これら2つの事実を踏まえて、セント・デイヴィズ教会を大司教座とし、カンタベリー大司教の管理下におくという位置づけをするのがよい⁽⁴⁶⁾。

この妥協案は、彼がこれまで展開してきた議論からすると大きな歩み寄りである。「セント・デイヴィズ問題」の目標のひとつ、同教会のカンタベリー大司教からの自立を断念するのであり、「問題」の解体につながる危険性すら含んでいる。では、もうひとつの目標であった自分の司教就任についてこのときの彼はどのように考えていたのか。彼は、自分の妥協案が受け入れられれば、カンタベリー大司教の聖別を受けるのが自分でなくてもよい、自分は今後候補に推されても辞退すると述べている⁽⁴⁷⁾。教会のためならばわが身を捨てる覚悟と読める発言である。

リヒターはこの発言を根拠に、ギラルドゥスが最重要視していたのはセント・デイヴィズ教会の独立であり、彼は少なくともこの時点で何よりもウェールズ人の政治的独立を願っていたことを示す、と理解している。ウェールズ人という「民族の発展」にとって重要な画期になったと言うのである。さらにリヒターは、ギラルドゥスが1198年以降掲げてきた2つの目標のうちで彼が本当に求めていたのは、自分の栄達よりもウェールズ教会の発展であったとし、ウェールズ史の偉人というギラルドゥスのイメージを裏書している⁽⁴⁸⁾。

しかし、この時ギラルドゥスが直面していた状況を考えると、リヒターとは違う理解が成り立つと私は考える。妥協案がこの時点で出された理由とかかわらせて説明しよう。

ギラルドゥスが「セント・デイヴィズ問題」を自身の司教就任と同教会の大司教座権とを密接に組み合わせて提起したのは確かである。結合させることでローマ教皇の支援が得られると期待したのである。したがって、この「問題」構成が大司教座権を優先させる道をふさぎ、最後の段階になってようやく開かれたという理解も可能である。しかし、1202年秋の会議におけるギラルドゥスは、このような抽象的理由をはるかに超える切実な問題に直面していた。上で述べたように彼はほとんどすべての支援者を失い、孤立無援の状況に追いつめられていた。追いつめられた人は何を考えるものだろうか。人によっては完全に敗北を認めて表舞台から消えることもあろうが、ギラルドゥスはこの段階でもまだあきらめていなかった。目標実現の可能性が低いとわかっていても、自分の名が後世に残るプランを提示することが自分にとってプラスになると判断した。彼は最後の段階で目標を後世に遺すべき名声に切り替えた。このように私は考える。

しかし、カンタベリー大司教はギラルドゥスの妥協案をまったく問題にしなかった⁽⁴⁹⁾。彼からすれば勝利が間近に迫っているのであるから、ここで妥協する必要はなかった。妥協しなくても教皇がイングランド王権に損失のないよう裁定してくれると彼は確信していた。

1203年早春、ギラルドゥスは第3回裁定会議に出席するためローマへ行った。セント・デイヴィズ教会の支持を失っていた彼は、残る最後の手がかりと考えたのであろうか、彼を支援すると記したウェールズ人支配者の手紙を持参した。手紙に署名しているのは北ウェールズのサウェリン・アプ・イオルウェルス (Llywelyn ap Iorwerth)、東ウェールズのマドッグ・アプ・グリフィズ (Madog ap Gruffudd)、南ウェールズのグリフィズ・アプ・リース (Gruffudd ap Rhys) など各地域を代表するウェールズ人支配者たちである。

ただし、彼らが一堂に会してギラルドゥスの支援を決め、彼を旗印にしてイングランド王権に対抗する動きをみせたのではない。彼が持参した手紙は、その内容や表現から判断して、ほぼ間違いなく彼自身が書いたもので、その際名

を連ねている人々の承諾を得たのかどうか不明である⁽⁵⁰⁾。ウェールズ人支配者たちの間でセント・デイヴィズ教会の独立を歓迎する気持ちが共有されていたのは確かであるが、あくまでもこれは気持ちであり、イングランド王権を敵にして獲得すべきとまで考えていた人はいなかったであろう。実際、リース・アップ・グリフィズ (Rhys ap Gruffudd) が死去した 1197 年以降ウェールズ人支配者で強大な国家を形成した者はいない。ギラルドゥスにもウェールズ人支配者たちの力が、イングランド王権に比して著しく弱体化していることはよくわかっていたはずである⁽⁵¹⁾。にもかかわらず彼らの手紙をつくり、提出したのは、ほかに支援者がいなくなっていたからであろう。

教皇はギラルドゥスが持参した手紙をまったく問題にしなかった。むしろリヒターが言うように、手紙に悪い印象をもった可能性が高い⁽⁵²⁾。教皇は基本的に聖界に属する「セント・デイヴィズ問題」ですらイングランド王権に損失をもたらさないよう配慮していたのであるから、ウェールズで王権に反抗する勢力が結集したとも受け取れる手紙を読めば、それに関与すること、まして、加担するはずがなかった。

1203 年 4 月に第 3 回裁定会議が開かれ、カンタベリー教会から大司教の代理人が 2 人、セント・デイヴィズ教会からギラルドゥスのほか 4 人が出席した。その 4 人はフォリオット、オズバート、フリップ、および、サンダフ教会のイヴォル (Ifor) で、いずれもセント・デイヴィズ教会の参事会員であった⁽⁵³⁾。教皇は今回の審議事項を、1199 年に行われた 2 つの司教候補選挙の有効性に限定した⁽⁵⁴⁾。ひとつは 6 月に開かれたセント・デイヴィズ教会会議でギラルドゥスが唯一の司教候補とされた選挙、もうひとつは、ギラルドゥス選出以前にセント・ドグマイル修道院長ウォルターが候補に選出されたという選挙である。後者は、第 8 節で説明したように、反ギラルドゥス派の一方的な主張で、フィクションであった可能性が高い。教皇が本来の争点をあえて避け、末節部分について裁定を下すことで「セント・デイヴィズ問題」に決着をつけようとしているのは明らかである。

ギラルドゥスは、審議の中で大司教側の主張する選挙が事実無根であることを証明できたと述べている。おそらく教皇もこの点をよく承知していたと推測される。しかし、教皇は2つの選挙について個別の真偽判定をせず、ともに無効という判定を下した⁽⁵⁵⁾。事実調べをすればギラルドゥスの主張が正しいことが判明すると分かっていたので、イングランド王宮との密約を守るためにはこのような策を弄するほかなかったのであろう。あえて理屈をつければ、2つの主張が妥協の余地なく対立して混迷が深まっているので、過去の経緯にとらわれず初めからやり直したほうがよいと判断したことになろうか。

教皇はセント・デイヴィズ教会の現状から判断して、やり直し選挙となればギラルドゥスが再度司教候補に推される可能性は低い。間違いなく大司教側の推す人物が選ばれ、大司教に忠誠の宣誓をする。その結果ギラルドゥスが提起した「問題」、特に大司教座権の主張も消滅する、と考えたのであろう。実際、裁定後の新司教選定はこの通りに進んだ。立場は逆であるが、ギラルドゥスも同様に判断した。彼は裁定を聞いた後、自分は司教にならなくても、ブレコンの大助祭としてセント・デイヴィズ教会の権利回復のために戦うと述べている。しかし、これは敗北者のいわば捨てせりふである。カンタベリー大司教の管理下で大助祭が単独で戦うことなど不可能であり、彼はこの点を充分知っていたはずである。

ただし、この時点においても教皇は裁定者という建て前を崩していない。例えば、もしセント・デイヴィズ教会メンバーがギラルドゥスの選出を否定するよう外部から強制されたことが今後証明されるならば、再度調査団を編成し審議すると発言している⁽⁵⁶⁾。また、エリー司教とウースター司教に対し、新しい司教の選出が正しい手続きで進められるよう監視し、大司教が新司教からセント・デイヴィズ教会の地位、権限を損なう誓約を求めないよう説得する仕事を委託している⁽⁵⁷⁾。いずれも裁定者としての教皇にふさわしい配慮に見えるが、実効力を欠いた発言や要望であり、ジェスチュアにすぎない。

裁定を下した後、教皇はギラルドゥス個人にも具体的な配慮を示している。

自分の裁定が事実を目をつぶり、ギラルドゥスに不利なものとなったことを幾分でも補おうとしたのであろう。まず、教皇はギラルドゥスの十字軍参加を免除した。ギラルドゥスは1188年にカンタベリー大司教ボードウィンとともにウェールズ各地で十字軍参加勧奨をした際に率先して参加の誓いを立てていたのであるが、教皇はこれを解除してやったのである。ただし、実際問題として60歳に近づいていた彼にとって過酷な遠征は論外であった。次に、教皇は、ギラルドゥスが3回の裁定会議出席のために支払っていた旅費の多くの部分をカンタベリー大司教が負担するよう取り計らった。さらに、教皇は、ギラルドゥスの長期不在に付け込んで彼の聖職録の一部を横領していた者2名を破門に処し、職録を返還させた⁽⁵⁸⁾。

教皇の裁定を受けて、1203年春から秋にかけてセント・デイヴィズ教会は改めて次期司教候補の選出作業を進めた。教会が最初につくった候補者リストにはセント・ドグマイル修道院長ウォルター、ウィットランド修道院長ピーターに加え、ギラルドゥスの名前も記されていた⁽⁵⁹⁾。しかし、この時点でギラルドゥスを含むリストを王宮に提示すればどのような反撃があるか教会メンバーにもわかっていたのであろう、このリストはすぐに書き改められ、ギラルドゥスに代えてフォリオットが入れられた⁽⁶⁰⁾。3人はいずれも大司教の意向に沿って行動してきた人物である。

しかし、リストを受け取った大司教は候補全員を拒否し、代わりに自分の側近であるジョfrey・ド・ヘンロウを候補として再提出するよう求めた。教会はこれに抵抗できなかったようで、次期司教はジョfreyに決まった。ジョfreyは当然のこととして大司教に服従の誓いをたて、特にセント・デイヴィズ教会の大司教座権を決して要求しないと約束した⁽⁶¹⁾。

こうしてギラルドゥスの提起した「セント・デイヴィズ問題」は完全に否定された。また、以後同教会の大司教座権が正式に取り上げられることはなかった。これは同教会、さらには、ウェールズの教会にとって大きな画期となった。

勝利したカンタベリー大司教はギラルドゥスをさらに追いつめようとした。ジョン王に働きかけて、ギラルドゥスを「王の権威を損ない、王国の平和を乱す者」という公式宣言を出させたのである⁽⁶²⁾。公式に王国の敵となれば彼の命は危険にさらされる。居所も生活を支える収入も奪われてしまうからである。ギラルドゥスは大司教に完全に屈服し、そのとりなしで王の宣言を取り消してもらいほかなかった。これは自尊心が強く、「問題」提起は正当なものであると信じる者には屈辱的であったが、ほかに道はなかった。ギラルドゥスは大司教の判断が正しいという服従声明を出し⁽⁶³⁾、これと引き換えに大司教は王が上記宣言を取り消すよう計らった。

1204年初めに王から特赦が出された後、大司教はギラルドゥスにいくつか提案をしたと推定されている。リヒターによれば、そのひとつはブレコン大助祭職に関するもので、ギラルドゥスはこの職を甥で同名のギラルドゥスに譲る、ただし、彼はこれまで享受してきた聖職録の一部を保持し、残りを甥が継承する、という案である⁽⁶⁴⁾。案とはいってもギラルドゥスにこれを拒否する力はなく、そのまま受け入れている。大司教は彼がセント・デイヴィズ教会の運営に関与する可能性を完全に排除したのである。彼に残されたのは文筆家としての栄光を求める道だけであった。

1203年以降のギラルドゥスは著述に専念した。今日わかっている限りでも新しい作品9点を完成し、3点の旧作に改訂ないし加筆がなされた⁽⁶⁵⁾。新作9点の中に本稿の中心史料『論駁』と『自叙伝』が含まれている。彼は追い詰められて「セント・デイヴィズ問題」を断念しても決してすべてを放棄したのではなく、最後まで自分のキャリア・デザインのひとつを追及し続けた。

参考文献(Ⅲ)

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

[1] Giraldus Cambrensis: *Descriptio Kambriae* (in Dimock, James E. (ed.):

- Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866) (『ウェールズ案内』)
- [2] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866,) (『ウェールズ旅行記』)
- [3] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambernsis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド地誌』)
- [4] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド征服』)
- [5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vl. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)
- [6] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [7] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョフレイ伝』)
- [8] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [9] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [10] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [11] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
- [12] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
- [13] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
- [14] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
- [15] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin

Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)

- [16] Giraldus Cambrensis: Topography on Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [17] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [18] ギラルドゥス・カンブレンシス, (有光秀行訳):『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
- [19] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
- [20] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): “I, Giraldus”, *The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)

(B) 聖人伝, その他

- [21] Evans, D.Simon (ed.): *Buched Dewi o Llawysgrif Llanstephen 27*, University of Wales Press, 1959.
- [22] Evans, D.Simon (ed., trans.): *The Welsh Life of St.David*, University of Wales Press, 1988.
- [23] Rhigyfarch (James, J. W. (ed., trans.)): *Life of St.David, the Basic Mid Twelfth-Century Latin Text with Introduction, Critical Apparatus and Translation*, University of Wales Press, 1967.
- [24] Rhigyfarch (Sharpe, R. & Davies, J.S. (eds., trans.)): Rhigyfarch's Life of St. David (in [41])
- [25] Wade-Evans, A. W. (ed., trans.): *Welsh Medieval Law, being a Text of The Laws of Howel the Good*, Clarendon Press, 1909.
- [26] Williams, Ifor (ed.): *Armes Prydein o Lyfr Taliesin*, University of Wales Press, 1955.

II 研究文献

- [27] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079 ~1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [28] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [29] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geogra-

- phy of Medieval Europe (in [58])
- [30] Brooke, Christopher N. L. : The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk, (in [31]).
- [31] Brooke, Christopher N. L. : *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
- [32] Charles-Edwards, T. M. : Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
- [33] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
- [34] Davies, J. Conway: Giraldus Cambrensis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46
- [35] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093~c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [36] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*, University of Wales Press, 1987.
- [37] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.
- [38] Edwards, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.
- [39] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.) : *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [40] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec (in [73]).
- [41] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.) : *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydel Press, 2007.
- [42] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral (in [41]).
- [43] Holmes, Urban T. : The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I , 1970.
- [44] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheiolog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [45] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [46] Isaac, G. R. : The Cult of St. David (in [41]).
- [47] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.

- [48] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [49] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire (in [73]).
- [50] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [51] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
- [52] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [53] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to the Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
- [54] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [55] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [56] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
- [57] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [58] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007
- [59] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae (in [39])
- [60] Rees, J. F.: *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.
- [61] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [62] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [63] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
- [64] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [41])
- [65] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David (in [41])
- [66] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
- [67] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [68] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [69] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentation by Giraldus Cambrensis,

Anglo-Norman Studies, vol. 20, 1998.

- [70] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [55])
- [71] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書[80])
- [72] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [73] Walker, R. F. (ed.): *Pembrokeshire County History*, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [74] Walker, R. F.: The Earls of Pembrokeshire, 1138~1379. (in [73]).
- [75] Williams, A. H.: *An Introduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [76] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [77] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [55])
- [78] Wooding, Jonathan M.: The Figure of David (in [55])
- [79] 有光秀行『中世ブリテン諸島史研究－ネイション意識の諸相』刀水書房, 2013年。
- [80] D. ウォーカー (編) (木下智雄 (訳)): 『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009年。
- [81] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズー独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史 I 先史～中世』, 山川出版社, 1991年)。
- [82] 永井一郎『『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性』, 『国学院経済学』第57巻3・4号, 2009年。
- [83] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと12世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻1号, 2010年, 第59巻2号, 2011年。
- [84] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻3・4号, 2011年, 第60巻2号, 2012年。
- [85] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン (I), (II)」『国学院経済学』第62巻2号, 3・4号。

註

- * 以下の註で, ギラルドゥスの著作に編纂者ないし訳者の名も付されている場合がある。これは編纂者ないし訳者の解説や註記を参照している場合で, ページ数はその所在箇所を示す。ギラルドゥスの本文やその英訳を参照している場合には彼の名前のみが記されている。

- (1) [5] Giraldus, p. 119. [20] Giraldus, p. 103.
- (2) [62] Richter, p. 113.
- (3) ギラルドゥスが教皇庁文書館で見つけた関連資料は『論駁』に引用されている。
[10] Giraldus (ed. Davies), pp. 16~38, 58, 130~35, 136~37, 139~41, 141~42, 142~43, 143~46.
- (4) [62] Richter, p. 113. [8] Giraldus, p. 167.
- (5) [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 57~58. [62] Richter, p. 113.
- (6) ウェールズのキリスト教史を書く際に彼が利用した情報源は、12世紀のウェールズ人が保持していた伝承、ペダの著作、ノルマン征服後に進められた教会改革の記録など多様である。[10] Giraldus (ed. Davies), pp. 16~25. [62] Richter, p. 114.
- (7) [62] Richter, p. 114.
- (8) [62] Richter, pp. 114~15.
- (9) [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 132. [62] Richter, p. 114.
- (10) [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 133.
- (11) デイヴィスこの調査が行われなかったら、教皇はギラルドゥスの請願に関心を持たなかっただろうと推測している。[10] Giraldus (ed. Davies), p. 57.
- (12) [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 58, 60, 106~10. [62] Richter, p. 115.
- (13) [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 56~57. [8] Giraldus, p. 178. [62] Richter, p. 115.
- (14) [62] Richter, p. 115.
- (15) もしこの段階でギラルドゥスが教皇の本心を知っていたならば、著作の中で触れているはずである。『自叙伝』、『論駁』をみると、彼が最終裁定の下されるまで教皇に対する信頼を保持していたことは明らかである。
- (16) [10] Giraldus (ed. Davies), p. 147. [62] Richter, p. 115.
- (17) [62] Richter, pp. 115~16.
- (18) [62] Richter, p. 118.
- (19) [5] Giraldus, pp. 7~8 の目次 nos. 33~36, 42, 49, 52. [62] Richter, pp. 115~16.
- (20) [62] Richter, p. 116.
- (21) [5] Giraldus, p. 8 の目次 nos. 45~47. [62] Richter, p. 116.
- (22) [5] Giraldus, p. 8 の目次 no. 52. [10] Giraldus (ed. Davies), p. 62. [62] Richter, p. 116.
- (23) [5] Giraldus, p. 9 の目次 no. 58. [10] Giraldus (ed. Davies), p. 98. [62] Richter, p. 116.
- (24) [62] Richter, pp. 116, 131.
- (25) [5] Giraldus, p. 109. [20] Giraldus, p. 93.

- (26) [62] Richter, pp. 118~19.

VII

- (27) [62] Richter, p. 116.
 (28) [8] Giraldus, p. 192. [62] Richter, pp. 116~17.
 (29) [8] Giraldus, p. 194. [62] Richter, p. 117.
 (30) [8] Giraldus, p. 194. [62] Richter, p. 117.
 (31) [10] Giraldus, p. 154. [62] Richter, p. 117.
 (32) [8] Giraldus, p. 195. [62] Richter, p. 117.
 (33) ただし、感情の爆発とは言っても著作の中においてであり、大司教に直接感情的な言葉を浴びせているわけではない。また、両者が交わしている多くの手紙においても、少なくとも表面上は双方穏やかに自己主張をしている。
 (34) [10] Giraldus, p. 98. [62] Richter, pp. 117~18.
 (35) [10] Giraldus, p. 99. [62] Richter, p. 117.

VIII

- (36) この方針はヘンリ二世の下で確立されたものであり、大司教の粘り強い説得によってジョンが王権の利益を最優先するという本来の原理に立ち戻ったことを示す。
 (37) [62] Richter, p. 118.
 (38) [62] Richter, p. 118.
 (39) [8] Giraldus, pp. 200~201. [62] Richter, pp. 118~19.
 (40) [8] Giraldus, pp. 221~22. [62] Richter, p. 119.
 (41) [62] Richter, p. 119.
 この抗議に関するギラルドゥスの記述がどこにあるのか私は確認できていない。
 (42) [62] Richter, p. 119.
 この質問と返答に関するギラルドゥスの記述がどこにあるのか私は確認できていない。
 (43) [8] Giraldus, pp. 219. [62] Richter, p. 119.
 (44) [10] Giraldus, pp. 201~202. [8] Giraldus, p. 223. [62] Richter, pp. 119~20.
 (45) 彼はオックスフォードの法学者たちに自分の状況と主張を述べ、支援を求めた。しかし、ここにも大司教の圧力がかけられたようで、支援を申し出る者はなく、逆に大司教の主張を受け入れるよう勧められた。[62] Richter, p. 120.
 (46) [10] Giraldus, pp. 162~64. [62] Richter, pp. 120~21.
 この案をつくる際にギラルドゥスが思い描いていたのはヨーク大司教座の位置づけであろう。本稿第3節参照。
 (47) [10] Giraldus, pp. 63, 163. [62] Richter, p. 120.

(48) [62] Richter, p. 120.

ギラルドゥスの妥協案はセント・デイヴィズ教会に対するカンタベリー大司教の支配を認めているのであって、同教会の独立が達成されるわけではない。

(49) [62] Richter, p. 121.

デイヴィスは、ギラルドゥスの妥協案について大司教は慎重に検討したうえで無視することにした、と述べている。[10] Giraldus (ed. Davies), p. 64.

(50) [10] Giraldus, p. 131. [62] Richter, p. 121.

(51) [83] 永井, 第5節。

(52) [62] Richter, pp. 121~22.

(53) [62] Richter, p. 122.

(54) 本稿第5節を参照。

(55) [8] Giraldus, pp. 267~68. [10] Giraldus (ed. Davies), pp. 68~69. [62] Richter, p. 122.

(56) [8] Giraldus, p. 271. [62] Richter, p. 122.

(57) [10] Giraldus, p. 172. [62] Richter, p. 122.

(58) [10] Giraldus, pp. 158, 160, 160~62. [62] Richter, p. 123.

(59) [8] Giraldus, p. 298. [62] Richter, p. 123.

教皇の裁定は1199年に行われた2つの司教候補選挙を無効としただけで、ギラルドゥス本人については評定していないから、論理的には彼の再選は可能である。

(60) [8] Giraldus, p. 298. [62] Richter, p. 123.

(61) [62] Richter, p. 123.

(62) qui in domnum et dispendium dignitatis regiae et pacis regni perturbationem anhelat. [62] Richter, pp. 123, 133.

(63) [62] Richter, pp. 123~24, 135.

(64) [62] Richter, p. 124.

(65) 年表の1203年~1220年の項を参照。

ギラルドゥス・カンブレシス関連年表

註

(1) * : ギラルドゥス関連事項。 ○南ウェールズ関連事項。 □イングランド関係事項。

(2) ギラルドゥスに関する事項の年については、下記の書物に基づく。

M. Richter: Giraldus Cambrensis, the growth of the nation, 1972.

A. Rutherford (ed.): I, Giraldus, the autobiography of Giraldus Cambrensis, 2002.

- (3) ギラルドゥスの著作に関する情報—書名、執筆年代、現存の版、など—については、下記の書物に基づく。なお、執筆年代は大部分がギラルドゥスの他の著作に含まれる書名や関連事項からの推定であり、多くの場合かなり大きな時間の幅をもつ。この年表では推定期間の最初の年に記載してある。

R. Bartlett: *Gerald of Wales, 1146~1223*, appendix I, pp. 213~221

1145 か 46 年

- * ギラルドゥス、マノルビエで誕生。

1148 年

- セント・デイヴィズ司教バーナードが死去。ギラルドゥスの伯父デヴィッド・フリッツジェラルドが司教に就任。

1151~53 年

- デハイバース王国がほぼ復興。

1154 年

- ヘンリ二世が即位（在位 1154~1189）。

1155 年

- リース・アプ・グリフィズ（君主リース）がデハイバース王国を単独支配。
- ヘンリ二世は南北ウェールズの支配を強化。

1158 年

- リースがヘンリ二世に忠誠を誓う。

1158~59 年

- リースがヘンリ二世に反攻を試みるが失敗。

1161 年

- カンタベリー大司教セオボルト・オブ・ベックが死去。

1162年

☐ カンタベリー大司教にトマス・ベケットが就任。

1163年

☐ 南北ウェールズ人支配者が再度ヘンリ二世に忠誠を誓う。ウッドストックの和陸。

1164年

☐ リースを中心にウェールズ人支配者が団結し、領地奪回。

1165年

☐ 南・北ウェールズ軍がクロゲンの戦いで勝利。領地拡大。

?年～1165年

* グロスターの教会で聖職者になる教育を受ける。

1165～74年

* 第1回パリ留学。リベラル・アーツを研究。

1166～67年

☐ 南北ウェールズ人支配者がアングロ・ノルマン領主を攻撃。

1169～70年

☐ ウェールズの有力アングロ・ノルマン領主がアイルランドに遠征し定着。

☐ カンタベリー大司教トマス・ベケットが死去。

1171年

☐ リース・アプ・グリフィズはヘンリ二世に忠誠を誓う一方、南ウェールズ最高の支配者という認知を獲得。

1172年

☐ ヘンリ二世はリースをデハイバース全域で王の代理を務める *justus* に任命。

1174年

* パリ留学を終えて帰国。

□ カンタベリー大司教にリチャード・オヴ・ドーフアーが就任。

1174～76 年

* カンタベリー大司教の代理人として南ウェールズ教会の改革を熱心に進める。①ロースのフランドル人が免除されていた十分の一税を徴収。②ペンブロークの小修道院が奪われていた所領を奪回。③妻帯していたブレコン大助祭ジョルダンの解任を提言し、実現。

1175 年

* ブレコン大助祭に就任。

1175～76 年

* セント・デイヴィズ教会の運営に参加し、同教会の利益を積極的に図る。①南ウェールズ各地にあった俗人の教会所有を摘発し、その所領を同教会へ返却させる。②セント・アザフ司教と対決し、セント・デイヴィズ教会のケリー教会に対する権利を確保。

□○ オックスフォードの会見でヘンリ二世がリース・アプ・グリフィズの地位と所領を確認。

1176 年

* セント・デイヴィズ司教デイヴィッドの死去にともない、次の司教候補に推挙されたが、辞退。この候補選出の手続きをめぐりヘンリ二世の疑いを招く。

* 後日、ヘンリの真意が、リース・アプ・グリフィズの甥であるギラルドゥスを南ウェールズで最高位の聖職に任命すると王のウェールズ統治にとって危険な存在になるという判断にあることを知る。

○□ ピーター・ド・レイアがセント・デイヴィズ司教に就任。

○□ ロンドンの宗教会議でセント・デイヴィズ教会が大司教座権を主張。しかし、ギラルドゥスは不参加。

1177 年

* 再度パリに留学。リベラル・アーツ、教会法、ローマ法を研究。

○□ リースはオックスフォードでヘンリ二世に忠誠の礼をとり、1175年の取り決めに再確認。

1178年

□○ ヘンリ二世が南ウェールズのアングロ・ノルマン領主の動きを抑制。

1179年

○ リース・アプ・グリフィズの息子たちの利己的行動で南ウェールズは混乱状況。

* パリ留学から帰国。

*□ カンタベリー大司教リチャードの依頼でセント・デイヴィズ教会の司教代理となり、同教会の参事会員と司教ピーターとの間で生じた混乱の收拾に努力。その結果ピーターとの関係が悪化。

1182年

*□ 司教代理の職を辞任。

1183年

* アイルランドを訪問。

1184年

○□ 南ウェールズで混乱状況が続く。ウースターの会見でリース・アプ・グリフィズはヘンリ二世に治安回復を約束したが失敗。

□ カンタベリー大司教リチャード・オヴ・ドーファーが死去。ボードウィンが次期大司教に就任。

*□ ヘンリ二世の要請を受け、王宮付き司祭に就任。以後1194年まで王の対ウェールズ政策を助ける。

*□ 大司教ボードウィンをリースに引き合わせる。

1185～86年

*□ イングランド王子ジョンのアイルランド遠征に同行し、ジョンの帰国後も滞在。

1187 か 88 年

- * *Topographia Hibernica* をオックスフォードで発表。以後、おそらくギラルドゥス自身が 3 回の改定し、4 種の版が現存。

1188 年

- * ☐ 十字軍勧奨のため大司教ボードウィンに従いウェールズを巡行。
- * *Expugnatio Hibernica* を発表。以後、ギラルドゥス自身が 2 回加筆し、3 種の版が現存。

1189 年

- ☐ ヘンリ二世が死去。リチャード一世が即位（在位 1189～1199）。
- ☐ ウェールズのアングロ・ノルマン領主達に失地回復の動き。
- ☐ リース・アップ・グリフィズは攻勢に出て、勢力拡大をはかる。息子たちの利己的行動が激化。

1190 年

- * 1190 年代から 1217 年の間に *De Principis Instructione* の執筆。1 つの版のみ現存。
- ☐ カンタベリー大司教ボードウィンが死去。

1191 年

- * *Itinerarium Kambriae* を発表。以後、ギラルドゥス自身が 1197, 1214 年に改訂し、3 種の版が現存。*Speculum Ecclesiae* の執筆を開始。完成は 1219 年以後。1 つの版のみ現存。
- ☐ レジナルド・フィツジョスリンがカンタベリー大司教に就任。同年中に死去。

1193 年

- ☐ カンタベリー大司教にハーバート・ウォルターが就任。

1194 年

- * イングランド王宮を離れ、ヘレフォードで著述に専念。
- * *Descriptio Kambriae* と *Vita Sancti Dividis Menevensis*

Archiepiscopi を発表。

前者は1215年に改訂され、2種類の版が現存。後者は1つの版のみ現存。

1195年

* *De Vita Galfridi Archiepiscopi Eboracensis* と *Vita Sancti Ethelberti* を発表。両者とも1つの版のみ現存。

1196年

* パリ留学を計画するが、英仏間の戦争で断念。リンカーンで著述に専念。

○□ リースが南ウェールズ東部国境域にまで進軍。生涯最大の支配域を獲得。

1197年

* *Gemma Ecclesiastica* を発表。1199年に教皇インノケンティウスへ献呈し、賛辞を得る。以後、ギラルドゥス自身が1度改訂し、2版存在していたが、現存するのは第2版のみ。第2版の作成年代はギラルドゥス後半生期。*Itinerarium Kambriae* を改訂し、第2版を作成。

○ セン・デイヴィズ司教ピーターがリース・アプ・グリフィズを破門。

○ リースが死去。(4月)

1198年

○□ ウェールズの軍勢がペインキャッスルの戦いでアングロ・ノルマン軍に大敗。

*○ セント・デイヴィズ司教ピーターが死去。(7月) 次期司教選出作業開始。

* *Vita Sancti Karadoci* を執筆し、翌年にローマへ持参。この書は現存せず。

*□ イングランド王宮に対し2人の司教候補を推薦。自身は含めていない。(10月)

1199 年

□ リチャード一世が死去。ジョンが即位（在位 1199～1216）。

* *Symbolum Electorum* を執筆。1 つの版のみ現存。

* □ カンタベリー大司教に対して、セント・デイヴィズ教会がギラルドゥスを司教候補に推挙。（1 月）しかし、王ジョンは最終的に彼を拒否。

* ○ □ 居住地をセント・デイヴィズに移し、同教会の作戦を直接指揮。イングランド王宮との戦い開始。

* ○ セント・デイヴィズ教会は次の 3 方針を決定。①次期司教候補はギラルドゥスのみ。②ギラルドゥスはローマ教皇の聖別を得て司教に就任。③同教会の大司教座権復活を教皇に要請。（6 月）

* アイルランドを訪問し、親類、友人に支援を要請。（夏）

□ ○ イングランド王宮はジョfrey・ド・ヘンロウを司教候補とし、セント・デイヴィズ教会に受諾を強要。

* ○ □ 教皇の裁定を求めてローマへ。（8 月）カンタベリー大司教の使者もローマ到着。

1200 年

* ○ □ 教皇インノケンティウス三世の審議開始（1 月）。大司教の手紙が読み上げられ、ギラルドゥスは大司教の主張に逐一反論。

* 教皇庁文書館でセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する資料を探索。

* *Invectiones* の執筆開始。第 1 部はこの年に完成。以後、1202 年まで第 2～第 4 部が書き継がれ、第 5 部は 1203 年以降に執筆、第 6 部をくわえて完成したのは 1216 年以降。1 つの版のみ現存。

□ カンタベリー大司教が手紙で、セント・デイヴィズの新司教はウォルターに決定したと教皇に報告。教皇はこれを拒否（春）。

* ○ 教皇がセント・デイヴィズ教会における司教候補決定手続きの有

効性を独自に確認すると約束。その間同教会の管理をギラルドゥスに依頼。

* ローマを離れ帰国。(夏)

□○ カンタベリー大司教がセント・デイヴィズ教会員に働きかけ、内部分裂を画策。王ジョンも最終的にギラルドゥス排斥を決意。(秋)

□* 大司教はギラルドゥスに大司教座権要求の取り下げを条件とする妥協案を提示。ギラルドゥスは拒否。

* セント・デイヴィズ教会で司教バーナードによる大司教座権要請の記録を発見。

1201年

□○ カンタベリー大司教がグロスターでセント・デイヴィズ教会員と面談。教会員たちはギラルドゥスを次期司教候補に指名したことはない」と否定。(年初)

* セント・デイヴィズ教会次期司教について教皇の裁定を受けるため、再びローマへ。(春)

○ セント・デイヴィズ教会の代表者が教皇の面前で、ギラルドゥスを司教候補として選出していないと証言。教皇は審議の延期を決め、同教会の過半がギラルドゥスを支持する場合にのみ審議再開を約束。

* ローマを離れ、帰国。(夏)

□ 王ジョンが教皇への手紙の中でギラルドゥスを反逆者と呼ぶ。(秋)

1202年

○* 教皇の使者が主宰してセント・デイヴィズ教会での審議。ギラルドゥスと同教会代表者はそれぞれ前年の主張を繰り返す。(秋)

*□ 教皇の使者に、カンタベリー大司教の支配下でセント・デイヴィズ教会を大司教座とするというに妥協案提出。大司教は拒否。(9月)

* セント・デイヴィズ教会次期司教に関する教皇の裁定を得るためにローマへ。

1203 年

- * ○□ 教皇が、1199 年に行われたという 2 つの司教候補選出をともに無効とする最終判定を下す。結果的にギラルドゥス主張を否認し、イングランド王宮の主張を黙認。(4 月)
- * セント・デイヴィズ教会は改めて司教候補を選出。当初はギラルドゥスも含まれていたが、間もなく削除。
- カンタベリー大司教は新候補をすべて拒否し、ジョフレイ・ド・ヘンロウを新司教として聖別。(11 月)
- * 王ジョンはギラルドゥスを王国の敵と呼ぶ。
- * □ ギラルドゥスが大司教の和睦案を受諾。セント・デイヴィズ教会の大司教座権の主張を繰り返さず、甥ギラルドゥスにブレコン大助祭の職を譲るという条件で王の許しを得る。(12 月)
- セント・デイヴィズ教会の大司教座昇格の可能性は消滅。
- * *Invectiones* の第 5, 6 部の執筆開始。

1204 年～1205 年

- * アイルランド訪問。

1205 年

- * 1205 年から 15 年の間に *De Fidei Fructu Fideique Defensu* を執筆。現存せず。
- カンタベリー大司教ハーバート・ウォルターが死去。次期司教にレジナルドが就任。

1206 年

- * ローマ巡礼の旅。
- カンタベリー大司教レジナルドが死去。次期大司教にジョン・ド・グレイが就任。同年中にジョンも死去。スティヴン・ラングトンが後継大司教に就任。

1207 年

- * リンカーンに定住して著作活動に専念。

1208 年

- * 甥ギラルドゥスとブレコン大助祭職禄の分配をめぐって争う。
- * *De Rebus a Se Gestis* と *Speculum Duorum* の執筆開始。両書とも 2116 年までには完成。ともに 1 つの版のみ現存。

1213 年

- * *Vita Sancti Hugonis* の第 1, 2 部を執筆。以後, 1219 年までの間に第 3 部を執筆。両者をあわせて 1 つの版のみ現存。 *Vita Sancti Remigii* の第 2 版を作成。

1214 年

- * *Itinerarium Kambriae* を改訂し, 第 3 版を作成。
- セント・デイヴィズ司教ジョfrey・ド・ヘンロウが死去。

1215 年

- * *Descriptio Kambriae* を改訂し, 第 2 版を作成。

1216 年

- * *Invectiones* 完成。この後, 同書を抜粋, 要約した *De Giraldo Archidiacono Menevensi* の執筆。1 つの版のみ現存。
- セント・デイヴィズ司教にイオルウェルス・ゲルヴェイスが就任。

1217 年

- * *Catalogue Brevior Librorum Suorum* と *Retractiones* を執筆。ともに 1 つの版のみ現存。

1218 年

- * *De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae* を執筆。2 つの版が現存。ひとつはおそらくギラルドゥス自身による要約版。

1220 年

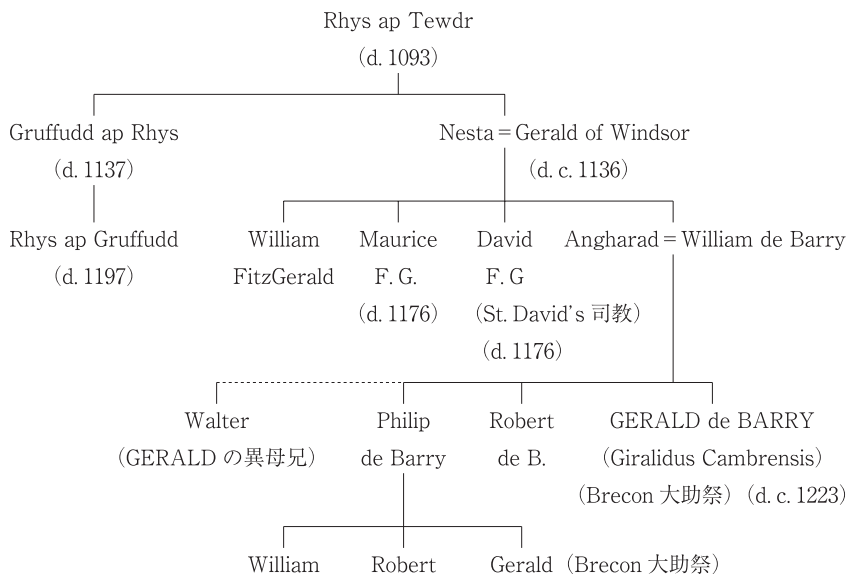
- * *Epistola ad Stephanum Langton* と *Epistola ad Capitulum Herefordense de Libris a Se Scriptis* を執筆。ともに 1 つの版のみ現

存。これらの書簡の中でギラルドゥスは現在では失われてしまった自作の地図 *Mappa Kambriae* に言及。

1222 年か 1223 年

* おそらくリンカーンで死去。

ギラルドゥスの家系（母方を中心に）



ギラルドゥスと同時期の高位聖職者（＊は特に深い関係にあった人）

カンタベリー大司教

Lanfranc (1070～1089)
 Anselm (1093～1109)
 Ralph (1114～1122)
 William (1123～1136)
 Theobald of Bec (1139～1161)
 Thomas Becket (1162～1170)
 Richard of Dover (1174～1184)
 Baldwin (1184 or 1185～1190) (＊)
 Reginald FitzJocelin (1191)
 Hubert Walter (1193～1205) (＊)

セント・デヴィズ司教

Sulien (1073～1078)
 Abraham (1078～1080)
 Sulien (1080～1085)
 Wilfred (1085～1115)
 Bernard (1115～1148)
 David FitzGerald (1148～1176) (＊)
 Peter de Leia (1176～1198) (＊)
 Geoffrey de Henlaw (1203～1214) (＊)
 Iorwerth [Gervase] (1215～1255)

